
朔望の月

お春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朔望の月

【Nコード】

N9428Z

【作者名】

お春

【あらすじ】

もしも、めんどくさがりの女子高生が、不思議な世界に迷い込んだら。

少女、2人(前書き)

一応、和風ファンタジーを目指しています。

不思議の国のアリスをモチーフとしていますが、微妙です…。

未熟ですが、どうぞよろしくお願いします(^^)(

少女、2人

森月 朔。16歳。

日本人。一応女子高生。

只今、自宅で宿題中。

「朔ー、あんたほんとに女子高生？」

「うん、まあ。…なんで？」

朔はため息をつく友人をみて、首を傾げた。

「…あんた、人からよく、変わってるね〜とか言われない？」

「…」

「凶星か…」

もう一度、深いため息をついたのが、

星野 結衣子。同じく16歳。

高校入学時にできた、朔の友達。

そして彼女は、朔にとっての最後の友人である。

高校に入学したての頃は、朔の周りには友達と呼べる人たちが沢山いた。

帰りに同じクラスの男子について話したり、休日に遊んでプリクラを撮ったりもした。

が。

4月中に、友人と呼べる人の数は半分に減った。

5月には、半分が半分になった。

6月には、数える程度に。

7月は変わらず。

そして夏休み真っ盛りの8月。

あれだけいた友達が、遂に1人になった。

理由はわかっている。

この、めんどくさがりな性格。

何をすることも適当で、最初こそ合わせていた話も、途中でめんどくさくなってやめる。

外に出るよりも家で寝ている方が好きな極度の出不精。

なのに興味のある事は熱中したら止まらない。

周りから、一緒にいてもつまらないと言われるのも、納得できる。

本当は、それじゃあだめだとわかってはいるものの、なかなか直せない。

というか、直すのすらめんどくさい。

それが彼女の性分なのだ。

「…部屋も汚いし…あんたさあ、そういうところがだめなんだって。

…聞いている?」

聞いている?

突然の問いかけに、朔は戸惑った。

全くと言っていいほど、耳に入らなかった。

「…ごめん、聞いてない」

正直に、そう言う。

「…そうだね。あんたに説教しても聞くわけないよね。っていうか、そこは普通聞いているって言うべきじゃない?」

結衣子は半分呆れたように朔から視線を外した。

暑いのか、流れる汗をタオルで拭う。

だって、嘘ついたら後がめんどくさいじゃん。

…とは言わず。

「次からそうする」

「…」

はあ、とまたため息をつかれる。

今日で3回目。

会ってまだ10分足らず。

「結衣子、宿題やる」

がつくりと肩を落とす彼女に朔は声をかける。

とりあえず、今日の目的を果たしてから結衣子のため息について考えよう。

朔は目の前にある問題集を一冊とり、問題を解き始める。

「…自由人め…」

それをみて、結衣子がぼつりとこぼした言葉も、朔の耳には入らない。

頭を巡るのは、数字と記号と公式。

心地よいリズムにのって、手に持つペンが踊る。

勉強は、朔にとって苦痛ではない。

特に考え込むこともなく、答えがわかるから。

元友達の中の何人かに、頭がいいね、と言われたから多分そうなのだろう。

比較をしたことがないから、いまいちよくわからないけれど…。

とりあえず、人間関係よりも何千、何万倍も楽なことは確かだ。

「ねー、朔」

しばらくして、結衣子の声が聞こえた。

見れば彼女が、下敷きでパタパタと顔をあおぎながら、斜め上を見

つめている。

「なに？」

「あつい」

なるほど、結衣子はエアコンを見ていたらしい。
でも残念。

「…図書館行く？」

「なんでよ」

「これ、壊れてるから」

去年の夏、宿題奮闘中にいきなり温風がふいて、それからすぐに風すらふかなくなった。

「…」

結衣子はある得ないというような目で朔を見つめてきた。

「…行かない？」

「アイス、奢ってよ」

エアコンを買いに行くより、そっちのがまし。

買いに行くのなんて、めんどろな事の極みだしね。

朔は頷くと、荷物をまとめ、結衣子と共に部屋を出た。

階段を降りて、玄関で靴を履く。

サンダルがよかったけど、スニーカーしかないからそれを履いた。

「…あ」

「どうしたの？」

「…財布忘れた」

めんどろさいが、取りに行かないと。

アイスが買えない。

「あんたねえ…」

結衣子が呆れたような声を出す。

靴を履いたままの状態で、部屋まで行こうとする朔の耳には、はあ、という結衣子の小さなため息が聞こえた。

… 4回目。

そろそろ結衣子も私から離れてゆくのかな。

何となく察しはついていた。

彼女のため息の理由。

それでも、離れていったらいいだけだ。

いつものように、友達から元友達にカテゴリーを変えるだけ。

他の子たちの方に行っただって別に。

引き止める理由なんてないんだし。

ひとりぼっちは慣れている。

… ああ、でも。

「はあ…」

ただ少しだけ、心の奥底で泣いている朔がいることも、確かであった。

追いかけて、落ちて。(前書き)

出来るときに沢山投稿します(^^)

追いかけて、落ちて。

「あつっー…」

結衣子が太陽を見上げ、顔をしかめる。

朔もつられて見てみれば、目を潰す程の輝きが

、雲一つない青空を支配していた。

こんな日は、やっぱり部屋でのんびりしていたい。

外になんていたら、熱中症で倒れてしまいそうだ。

「アイスどこで食べる？」

「そこ。日陰だし」

しっかりと奢らされたアイスを手を持ち、朔は広場のような所にあるベンチに腰掛けた。

広い公園には、小さい子供の姿も見える。

よくもまあ、暑いのにあんなにはしゃげるものだ。

若いっていいなあ、とか思いつつ、朔は吹き出る汗を拭うのも億劫になって、さっさとアイスの袋を開ける。

冷たい。

ひんやりとした感覚が、喉元を通り抜けてゆく。

「はあ、生き返るーっ。やっぱり夏に食べるアイスは最高だね、朔」
結衣子の言うとおりだ。

最高。…でも。

「頭いたい…」

頭を、何ともいえない痛みが走る。

初めての体験。

キーンという表現が似合うこれが、噂に聞くアイスクリーム頭痛というものらしい。

かなりいたい、これ…。

「あんた、がつつきすぎだって」

アイスなんて溶けてこぼれるのが嫌で、あんまり食べないから。

しょうがないんだよ。

と反論しようとしたその時、足にぼとりと何かが落ちた。

「あ」

…アイス。

思いつきり、こぼれている。

棒に残った方が少ないんじゃないの、これ。

「わ、朔こぼれてるじゃん！」

「…どうしょ」

「ティッシュとか、タオルは？」

「…」

持つてるわけがない。

手洗っても自然乾燥で事足りるから。

「…あんたが持つてるわけないよね」

いろいろと悟ったらしい結衣子が、バックをこそこそとあさり出す。

「しょうがない、これ使って」

可愛いキャラクターの描かれた、ハンドタオルが差し込まれる。

さすが女子。

タオル持ち歩きなんて、尊敬します。

朔はそんな事を考えながら、差し出されたタオルでアイスをぬぐい

とり、個体は地面に捨てた。

「洗って返す」

「いいよ、別に」

「…じゃあ、お言葉に甘えて」

朔はアイスでべたべたのタオルを結衣子に渡す。

そう言ってくれるなら、甘える事にしよう。

その方が、めんどくさくなくて良いし。

「いや、そこは甘えないですよ、人として…。まあいいや」

彼女は文句を言いながらもタオルを受け取る。

「そろそろ行く？」

バックにしまう途中に、ケータイで時間を確認した結衣子が立ち上

がる。

「行く」

朔も頷いて、ゴミを袋に入れてから立つ。手に持ったゴミをどうしようかと、辺りをきよろきよろと見渡せば、広場の奥の方に白いフェンスでできたようなゴミ箱があった。

遠い…。

距離にすればほんの20メートル程だが、日向だし、相変わらず太陽はギラついてるしで、朔は顔を歪めた。

「めんどいなあ…」

嫌気がさして、ぼつりと呟く。

「なんか言った？」

聞こえていなかったのか、結衣子は首を傾げる。

「別に。ちよっとゴミ捨ててくる」

追求されるのもだるい。

ゴミ捨てて即戻ってこよう。

朔の持つゴミ袋がかさりと音をたてる。

が、その音も蝉の大合唱により打ち消され、朔の耳には入らなかった。

「あつ…」

射るような鋭い熱が、身体中を這いずりまわるような感覚。

それに思わず立ち止まり、朔はゴミを捨ててから動く事を躊躇った。ゴミ箱の中からは、特有の臭いが溢れている。

うわ、これ臭い。

絶対なんか腐ってるよ…。

耐えきれなくて、朔は視線をあげ、涼しげに広がる森林を見つめた。

「…?」

なにあれ、…猫?

少し遠くを、白銀の生き物が走っていく。

猫にも見えたそれは、なんと二足歩行で走る、走る、走る。

「朔ー? あんた何してんの…って、ちよっと!」

結衣子の声が、朔の背中にぶつかる。

朔が木々を通り過ぎれば、蝉が驚いて飛び立つ。追いかけていた。

いつの間にか、身体が動いて。

暑さなんて、流れる汗なんて忘れて。

だって、あんな生き物見たことないし。

それにやっぱり、興味のあることはとことん追求する性格だから。

「朔っ！」

「結衣子」

隣には、汗だくの結衣子がいた。

「あんた、何いきなり走り出してんの…っ」

「ちよっと面白いことがあって。ほら」

指をさして示せば、結衣子の目が大きく見開かれた。

凄い驚きよう。

「何あれ…狐、だよな？」

狐？

朔は自分で示した指の先を見る。

「…ほんとだ。狐、だ」

白銀の、狐が二足歩行。

わけがわからなくなつて、朔は一瞬瞳を閉じた。

何か、こんな感じの話、聞いたことのあるような。

これって…。

思い当たる節をみつけて、朔は目を開いた。

「…あれ」

「？」

「いない…」

いつの間にか、狐がなくなっていた。

「ほんとだ…」

木々が生い茂るなか、2人の少女が顔を見合わせる。

「暑くて、脳がおかしくなったのかな、私たち」

結衣子は自分の頭を叩いた。

「でも、いたよね？確かに見たし」

目を離れた隙に、別の方向に行ってしまったのかも。

そんなことを思っても、納得のいかない朔は一步を踏み出す。

「どこ行くの？」

「探す」

「戻らないわけね……」

汗だくの2人は、見えない狐を追って歩き出す。

結衣子はぶつぶつと文句を言っているが、朔は気にしない。

狐の方が今は大事。

「ねえ、やっぱり戻らない？図書館行かないと」

後ろについていた結衣子が、さらに奥に行こうとする朔を引き止めるように声をはった。

「ちよつと待つて」

見つけられる気がするから。

そう言つて、ごく普通に前へ足を踏み出した、その時。

ふと、朔は身体が宙に浮いているような気分になった。

「え」

いや、正確にいえば、浮いていた。

「朔っ!？」

結衣子の声が、遙か遠くへと消えてゆく。

地球の重力により、朔は闇の中へと引き込まれる。

落ちている。

猛スピードで、真っ暗なトンネルを急降下。

「……」

聞いたことのある、このシチュエーション。

ウサギを追った、かの有名な少女と同じ。

これって……。

「……アリス？」

穴には十分お気をつけ下さい。(前書き)

恋愛ものを持っていけると良いんですが…。

アクセスありがとうございます (^ - ^)

暇つぶしに読んで頂ければ光栄です。

穴には十分お気をつけ下さい。

どれくらい時間が過ぎたのだろう。

いくら落ちても、最後は見えない。

穴に落ちるなんて、やっぱりこれはアリス…？

いや、でもあれは物語だし、百歩譲っても夢の中の話ってことで落ち着いてるはずで。

…夢？

朔は思いついたように頬をつねった。

いたい…のは当たり前。

夢なわけがないんだから。

というか、追ったのは狐だし。

あれ？

アリスは何を追ったんだっけ。

さっきまでわかってたはずなのに。

…ああ、だめだ。

幼い頃読んだ本の記憶なんて、曖昧すぎて使い物にならない。

長い間、真つ暗闇を落ちていた朔は徐々に余裕をなくしていた。

落ちたら死ぬ？

この年で、人生の幕が閉じる？

「…」

思えばつまらない人生だった。

こんな事になるのなら、もっと積極的に楽しめば良かった。

もう死ぬんだ。

誰にも気づかれずに、こんなわけのわからない場所で。

「朔ーっ！」

結衣子の声が聞こえる。

死ぬ前に、最後の友達の声が聞けて良かった。

…ん？

「…結衣子？」

「朔っ！よかった、心配したよ…」
いる。

確かに、彼女が。

上から降ってきた。

なんで。

いや、そんな事はどうでもよくて。

「穴に、入ったの？」

「朔が心配で…」

「怖くなかった？」

どこまで続いているかわからない穴がある事を知っているはずなのに、自ら飛び込む。

「怖い？…どうして」

「…」

その答えは、予想外だった。

「落ちたら、多分死ぬよ」

「…あ」

さあ、と結衣子の顔が青ざめる。

全く考えになかったのか、考える余地もなかったのか。
とりあえず、朔は啞然とした。

「で、でも、ほら。もしかしたら、地球の反対側なんかに行くかも」
結衣子は慌てているのか意味不明な事を言い出す。

「残念だけど、地球の中心部に到達する前に死ぬ」

「…じゃあ、地底人と遭遇するかも」

相当焦っているのか、結衣子は普段の彼女なら言わないようなこと
まで言い出した。

「…それより、いつまで続くのかな、これは」

あえてそこはスルー。

「無視しないで」

なんだかもう、さっきまでの余裕のなさが一気に馬鹿らしく思えた。

自分より遙かに余裕のなさそうな人を見たら。

「…てゆうか、この穴が続かなかつたら私たち死ぬんでしょ。普通に考えたら、わかることなのに。私、馬鹿だ…」

結衣子はさり気なくひどいことを言っている。

つまり、気づいたら穴になんか自分から落ちないって事だ。

……。

「うん。落下の衝撃はかなり凄いと思う」

あえて結衣子の言葉はつつこまなかった。

つつこんだらつつこんだで、いろいろ傷を負いそうだから。

めんどくさいし。

「…それ、ほんと？」

「うん」

朔は、複雑な気持ちで頷いた。

全身の骨が砕けてもおかしくはない。

そう考えると、背筋が凍りついた。

…怖い。

この長い距離を落ちているのだから、さすがに生きてはいられないだろう。

「私、一生このままがいいかも」

「…ほんとに？」

いつ終わりがくるかもわからない状態を、一生？

気が遠くなるような意見だ。

「何十年も、こんなところにいたいなの？」

そう尋ねると、結衣子はしばらく黙り込んだ後、かぶりをふった。

「…やっぱりいや。…でも、死にたくない」

結衣子の瞳が、恐怖によって潤み出す。

そして、一気にあふれ出したそれを見て、朔は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「ごめ、涙…」

ぼろぼろと玉のような涙がこぼれた。

できることなら、結衣子だけでも助けたい。

自分のせいで、こうなってしまったのだから。

「私、まだ死にたくないなあ。…怖い」

暗闇に、結衣子の言葉だけが響き渡る。

どうにかしたい。

しかし、今回は残念ながら朔にどうこうできる度量を遥かに越えていた。

「死ぬのは怖いよ」

朔は、ぎゅっと目をつぶった。

おとうさん。おかあさん。

親不孝者でごめんなさい。

なるべく早く、私のことは忘れてください。

地上にいる両親に、短く別れの言葉をおくる。

そして、結衣子の手を強く握った。

せめてもの、罪滅ぼし。

「死にたくない…。もっと、生きたい」

結衣子が微かにそう呟いた。

結衣子のおとうさん、おかあさん。

本当に、ごめんなさい。

朔は結衣子の両親へと強く謝罪した。

その時。

暗闇に慣れきった瞳に、突然白い光が差し込み、朔は眩しさに目を

覆った。

「っ…」

何？

朔はそう言おうと口を開くが、そこからは肺から押し出される空気しか出てこなかった。

衝撃。

その2文字が、頭の中を閃光のように駆けていった。
やっと、終わりがきたんだ。

短い人生だった。

痛みなしで死ねるなら、それはそれで嬉しい。

痛みというよりか、身体が自分のものでなくなるような感覚。頭を強く打ったのか、意識が危うい。

その隣で、光の中に倒れている結衣子を見ながら、朔は声を絞り出す。

「結衣子…ごめ…」

ん。ほんとに。

そう伝えたかったのに、薄れゆく意識が邪魔をして、うまく言えない。

そして、謝罪の言葉すら最後まで言えないまま、朔はかろうじて残っていた意識を手放した。

「…は」

あれ？

…死んだはずじゃ。

いや、死んだはずっておかしいんだけど。

もしかして、ここは天国？

「…なわけないか」

起き上がってみれば、2人は地面に寝ていたらしかった。

地面には藁がしかれ、服は汚れていない。

どうやら、外のような。

が、明らかに朔の知っている世界ではなかった。

毒々しい紫の空に月は2つ。

三日月と、満月に近い楕円の月。

そこに、色とりどりの金平糖が星として輝いている。

辺りの木に実るのは、遺伝の法則を無視した様々な果物。

桜が咲いていると思えば、鈴虫の鳴き声が美しく響く。

「…」理解に困った朔は、隣で寝息をたてている結衣子を揺さぶる。

「…ん。…朔？」

結衣子は目をしばたたかせ、不思議そうに、そして若干恨めしそうに朔を見つめた。

眠いらしいが、それどころじゃない。

「結衣子、…生きてる」

とりあえず、それしか出てこなかった。

言いたいことは違ったが、彼女の頬にうつすらと残る涙の後を見た途端、それしか言葉が出なかった。

「…ほんとだ。生きてる。生きてるよ、朔！」

声がきらきらと輝いている。

穴の中では、死にたくないと言っていたはずなんだけど。

まあ、生きてて良かった。

「うん」

「で、ここは？それに、私達落ちたのに、なんで生きてるの？」

「え？」

結衣子の、突然の問いかけ。

「だから、ここはどこ？」

きよろきよると、結衣子は起き上がって辺りを見渡す。

「あつ」

「何？」

「夢、だと思う」

そう言うしか、ない。

全くここについての、知識がないのだから。

むしろ、そう答える方がまともな気がする。

「現実、しっかり見つめよ？」

…どうやら、私はまともではないらしいです。

友達いない時点で、まともとは遠く離れてしまっているけど…。

「…じゃあ、結衣子は？」

逆に聞いてみる。

すると、彼女は困った顔つきで上を見上げた。

「えっと…ほら…。あつ」
結衣子が微笑む。

「？」

「月、きれいだよね、ここ」
なんか、逃げられた気がする。

聞きたかったのは、そうじゃなくて…。

…えっと。

朔はなんだか全身の力が抜けて、結衣子にもう一度尋ねるのも億劫になった。

もう、めんどくさい。

2人は、何がなんだかわからないまま、笑いあう。
どこにいようと、今の彼女達には関係なかった。

「…あの」

不意に、声をかけられる。

ふりむけば、そこには男がいた。

「こんな時間に外にいては、危ないですよ」

男はにこりと笑む。

人の良さそうな笑顔を向けられて、朔と結衣子は顔を見合わせた。

…なに、コイツ。

あやかしのくに(前書き)

感想等頂けると

嬉しいです(^ ^)

あやかしのくに

男の風貌は、今まで異様だらけを体験してきた2人にとってかなり普通、に見えた。

180センチはあるであろう身体はすらりとしてはいるが、しつかりと筋肉がついている。

優しいなその瞳は深い深い闇色で、見る者を吸い込むよう。

艶やかな短髪は瞳と同じ色をして、程良く焼けた首筋が何とも言えない男らしさを醸し出していた。

「ここは妖姫様が統轄している地区ですよ。こんな遅い時間に外にいと危険です」

着流し姿の男は、流れるような無駄のない動きでしゃがみ込む。

「やっぱり普通じゃない。」

「凄く、綺麗。」

「ありがとうございます」

「……ん？」

「あの、あなたは……？それに、ここは一体」

……何で心を読まれたかはとりあえずおいといて、朔は結衣子をじっと見つめた。

自分はいかんせん会話能力が欠乏しているため、こういう事は結衣子に任せた方がいい。

絶対。

「それについては、私の家でお話したいのですが。あまり外にいないので」

男は目を細めてにこりと笑う。

家か。

そう聞くと若干気が引ける。

まあ、この人なら大丈夫な気もするけど。

「……どうする？」

結衣子が不安そうな顔つきで聞いてくる。

「大丈夫じゃない？」

多分、ね。

結衣子は適当な朔の返事に、呆れたようにため息をつく。それから少し考えていたが、決心したのか小さく頷いた。

「では、行きましようか。すぐそこです」

男はすつとした動きで立ち上がる。

それにつられて、2人も立ち上がった。

「あの」

不意に、結衣子が声を発した。

が、男は振り向いて人差し指を口元に持っていくと、静かに、と言った。

「カルタ衛兵がうろついてます。見つかると厄介なので、早く行きましよう」

男がちらりと視線を向けた先を見れば、美しい和柄のカードが2枚並んでいた。

鬱蒼と木々の茂る森の中で、話し合っているようだ。

丁度不思議の国のアリスのトランプ兵のような容姿で、手には槍を持っている。

遠いためか、全くこちらには気付いていない。

ありがたいけど、それでいいのか。複雑。

「見つかると後々面倒なので、民家の裏を通りましよう」
3人はゆっくりと方向転換し、民家の裏に消えていった。

「ここが私の家です」

男の家は、どこかで見たような造りをしていた。

周りの家も、似ている構造。

「ね、見たことあるよね？」

結衣子も同じ思いをしているらしい。

「うん」

どこだっけ。

えーと…。

「…」

あ、イライラしてきた。

「朔？行くよ？」

結衣子に思考を邪魔される。

…後少しだったのに。

「あ、うん」

ほんのちよつとイラつきながらも、2人は男の家へと足を踏み入れた。

結衣子の表情は緊張しているのか、こわばっている。

「兄さま、お帰りなさい」

家に入ると、これまた可愛らしい少女が出迎えてくれた。

瞳がぱつちりとした、真つ白な肌の少女。

日本人形を見ているようなそんな気分になる。

もう、さっきのイライラなんてぶっ飛んだ。

かなりかわいい。

おかつぱって最高。

見れば結衣子も、緊張なんて吹き飛んだようだ。

「ただいま、りつ。遅くなって悪かったよ」

「心配しました。…その方たちは？」

ふんわりと笑むりつは視線を2人に向ける。

笑みが消え、いぶかしげに見つめるそれも品があって、朔は嫌な感じがしなかった。

「外にいると危険だからつれてきたんだ。名前は、えーと…」
男は頭をぼりぼりとかく。

そういえば、自己紹介をしてなかった。

「森月 朔です」

「星野 結衣子です。すみません、急に押しかけて」

さすが結衣子。

そんな気使い、毛頭なかった。

「いえ、大丈夫ですよ。…私は麻之助。年は19。こっちは妹のりつ」

「りつです。15です。よろしくお願ひしますね」
意外に2人とも若い。

話し方から、もう少し年上に見えた。

というか、りつが年下とは。

大人っぽいな、この子。

中へと案内されると、りつは2人に年を聞いてきた。

16だ、というと彼女は嬉しそうに微笑んだ。

りつは同年代の女の子が周りにいないため、少しさみしい、と麻之助に聞こえないように言う。

そんな話をしばらくしていたが、急に結衣子が何か思い出したかのように真剣な表情になった。

客だから、と言うことで出されたお茶が白い煙をあげている。

畳の匂いが朔と結衣子をリラックスさせ、同時に懐かしいような気分になった。

それに反応したのだろうか。

肉じゃがを食べたら母親を思いだす感じ？

と、こんな阿呆な事を考える朔において、3人は本題に入っていく。

「あの、ここは一体どこなんでしょうか？」

結衣子が、おずおずと尋ねる。

それに、麻之助がきつぱりと答えた。

「ここは、夢成りの国。妖姫様が統べる、人間と妖の国です」
妖。

考えるのがめんどくさくなって帰ってきた朔は、その単語に興味を持つ。

さっきのカルタ衛兵とやらもその類か。

…明らかに見たらわかるよ、それは。

緩く自分につつまこんだ後、朔は話に集中し直した。

「その、妖姫様って何なんですか？」

「妖姫様は、人間と妖の間に産まれた子。…ですが、最近は素行が悪く、少しでも法を犯せば、異世界に送られてしまうのです」

異世界？

何そのファンタジー要素満載の言葉。

「異世界って、どういう…」

気になって集中の削がれた朔は、この日初めて発言した。

それに、他の3人は目を見開いたが、麻之助は快く答えてくれた。

「私もよくはわからないのですが…。妖姫様は不思議な力を持っているらしくて、罪人を他の世界へと送ってしまうのです。送られると一生帰って来れないらしく、最近は皆びくびくと怯えています」

「じゃあ、外にいてはいけないって言うのは…」

結衣子の呟くような声に、麻之助は頷く。

「見つければ、恐らく…」

送られていたんだ。

異世界とか言うところに。

朔は、ぞつとして身体を震わせた。

「ごめんなさい！麻之助さんを、危険な目に合わせてたんですね…」

結衣子が顔を青ざめさせて叫ぶ。

「いえ、大丈夫ですよ。むしろ、あなた達が捕まらなくて良かったです」

りつが結衣子の肩を抱く。

この人たち、人間ができてる。

「すみません、本当に」

「大丈夫？」

朔も結衣子の顔を覗き込み、声をかける。

「うん」

結衣子は朔にそつと笑いかける。

まあ、心配いらないか。

「…それで、お2人はなぜここに？」

今度は、結衣子の肩を抱いたりつが朔たちに尋ねる。
同年代の異様な2人に、興味津々なのだろう。

朔は、そんなりつに答える。

「私たちも、よくわからなくて。白い狐を追っていたら、穴に落ちて、気がついたらこの世界にいたんです」

「狐…。白狐の事でしょうか、兄さま」

麻之助は神妙な面持ちで首を縦に振った。

「白狐？」

「ええ、妖姫様に仕えている妖の事です」

…追わなければ良かった。

朔は、唇を強く噛んだ。

もしも追わなければ、こんな世界に来なくてすんだのに。

今更後悔しても遅いけど…。

「どうすれば、帰れるでしょうか」

「妖姫様の元へ行くしかないでしょう。罪を犯さなければ、妖姫様は帰ることを承諾してくれると思います」

麻之助がそう言いつつ立ち上がった。

「今日はもう遅いので、泊まっていつてください。良いよね、りつ」

「はい。りつもその方が嬉しいです」

断っても、行くところなんてないし。

りつちゃんも快くOKしてくれたことだしね。

お言葉に甘えさせてもらおう。

「え、そんな…」

「ありがとうございます」

結衣子を遮って、朔は晴れ晴れとした笑顔を見せる。

「…朔」

「ん？」

「あんだねえ…」

結衣子は小さな、小さな声で、

遠慮くらいしなよ、と 言ってほんとに小さくため息をついた。
…すいません。

あやかしのくに(後書き)

朔 さく

結衣子 ゆいこ

麻之助 あさのすけ

妖姫 ようき

妖 あやかし

と読みます(^o^)

一応。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9428z/>

朔望の月

2012年1月2日01時48分発行